

自閉症スペクトラム障害児への家庭課題による発達支援(1)

SCERTS モデルのアセスメントによる共同注意・模倣を中心とした支援経過を通して

○上村 誠也

小野里 美帆

(NPO 法人正讃会 相談支援かみひこうき) (文教大学教育学部)

KEY WORDS: 家族支援 自閉症スペクトラム障害 SCERTS モデル

I. はじめに: 一般に、自閉症スペクトラム障害(以下、ASD)児は共同注意の成立の困難さを抱えることや早期からの家族支援の重要性が示されている。Prizant ら(2005)が開発した SCERTS モデルは、ASD 児への包括的発達支援プログラムであり、社会・コミュニケーション(SC)及び情動調整(ER)の発達支援、ASD 児に関わる支援者や養育者への支援: 交流型支援 (TS) に焦点をあてている。これまで、大学の臨床場面や特別支援学校での取り組み等は散見されるようになったが、家庭支援についての研究はまだ非常に少ないのが現状である。そこで、本研究では、SCERTS モデルによるアセスメントを活用し、共同注意や模倣の成立に焦点をあてた家庭での取り組み(家庭課題)の支援経過について分析を行った。

II. 方法: 1. **対象児:** ASD の診断を受けた A 児(指導開始時 CA: 4 歳 7 ヶ月)。児童発達支援センターでの発達支援(5 日/週)を受けていた。新版 K 式発達検査の発達年齢は、認知・適応が 1 歳 10 ヶ月、言語・社会が 1 歳 1 ヶ月であった。SCERTS モデルによるアセスメントでは社会パートナー段階であった。注意の転動性が高く、自宅では着席の困難さや遊びの広がりにくさ、共同注意の成立の困難さがあった。そのため、自宅では iPad や DVD などを 1 人で楽しむことが多かった。また、保護者は本児の障害についての認識はあるものの、関わり方の難しさや自宅で一緒に遊びや活動をする

ことの難しさについての訴えがあった。2. **支援期間・場所:** X 年 2 月から X+1 年 4 月。本研究では、X 年 2 月~X+1 年 3 月までの支援経過を分析した。月に 1 度、筆者が自宅に訪問し、個別の机上課題(30 分)と保護者面談(1 時間: 家庭課題のフィードバック及び助言)を実施した。3. **支援方法:**

1) **アセスメント:** 支援開始前に SCERTS モデルによるアセスメントを実施し、目標設定を行った。X 年 9 月に再度アセスメントをし、目標や支援内容の見直しを実施した。X 年 2 月~8 月までを支援前期、X 年 9 月~X+1 年 3 月を支援後期とした。2) **家庭課題の実施:** 親子で関わる機会や簡単な課題に取り組む機会を設けることを目的とした家庭課題を提案した。保護者には、課題の取り組み及び記録の作成を依頼した。記録用紙には、交流型支援の項目から関わり方のポイントや課題内容を明記するとともに、保護者面談時にも具体的な関わり方について助言をした。4. **分析方法:** 各期別に以下の分析を行った。1) **アセスメント経過と主な家庭課題。** 2) **支援経過:** 机上課題時のエピソード及び保護者の記録用紙・面談時の記録を基に、支援経過について分析した。3) **SCERTS プロファイルの変化。** 5. **倫理的配慮:** 保護者に対し、研究の趣旨及び公表について文書にて同意を得た。

III. 結果: 1. **アセスメント経過と主な家庭課題**(Table 1): 各期別にアセスメントを行った結果、支援前期は主に共同注意の成立に焦点をあてた課題、支援後期は共同注意の成立に関する課題設定に加え、模倣についての課題設定を行うこととした。2. **支援経過:** 1) **共同注意:** 支援前期は、一緒に遊びや活動に取り組む時間の平均は 5 分であり、iPad での一人遊びや感覚遊びが中心であった。支援後期には母親と一緒に遊びや活動を楽しむ場面が認められるとともに(平均 22 分)、母親が本児の経験したことのない遊びや活動に誘いかけるとそれに応じる場面も増えた。また、生活場面の変化としては、お手

伝いに取り組む場面が増え、お皿等を並べる、食事で必要な道具を準備する、指示されたものを持ってこることもみられた。(2) **模倣:** 支援後期には、母親の語の一部の模倣や自発的に数字を言う場面が認められた。(3) **保護者のエピソード:** 週によって課題に取り組むことのできた頻度にばらつきはみられたものの、概ね週に 2 回程度の記録をすることが可能であった。支援前期の記録は「できなかった」「難しかった」といった記録内容が多かったが、支援後期には「できるようになった」などポジティブな記録内容がみられるようになった。また、記録の内容も細かく書かれるようになるとともに、保護者の心情(「こちらの言っていることを真似してくれて嬉しい」)や児のポジティブな側面(「新しい活動だったがとても頑張っていた」)への言及もみられるようになった。

3. **SCERTS プロファイルの変化:** 経過を Fig.1 にまとめた。

Table 1 アセスメントの経過と主な家庭課題

支援前期(X年2月~X年8月)		
家庭課題	一緒に遊びや活動に楽しく取り組みましょう。 (共同注意を意識して関わらしましょう。)	日常生活の中で簡単な声かけを聞いて動く/模倣を積み重ねていきましょう。 SU22 身近な活動で状況の手がかりに使う SU26 視覚の手がかり(写真や絵)に対して応答する
SCERTSモデルとの対応(SC-ER)	JA13 短い相補的な相補作用を行う JA22 人と物との間で視線を移動させる MR32 相互作用を求めてポジティブな情動を共有する	LS14 繰り返し学習する機会を与える IS42 コミュニケーションする前に子供の注意を確保する LS33 活動間のスムーズな移行を促すために、視覚的模倣を用いる
SCERTSモデルとの対応(TS)	IS11 子供の注意の焦点を追従する LS13 活動に予測できる流れを与える LS44 注意を高めるために、学習環境を整える	
支援後期(X年9月~X+1年3月)		
家庭課題	遊びや活動を通してやりとりの幅を広げましょう。 (様々な遊びや活動に取り組んでみましょう。)	ことばの模倣や動作の模倣を促していきましょう。 SU12 モデルの真後に促されて身近な動作や音声を模倣する SU45 距離を伴う模倣的なジェスチャーを使用する
SCERTSモデルとの対応(SC-ER)	JA14 長い相補的な相補作用を行う SR32 新しい状況や変化のある状況に参加する MR22 パートナーに注意を喚起されたとき、従事する	IS72 様々な伝達機能のモデルを示す IS11 模倣を促す IS23 給養のターンと応答のターンのバランスをとる
SCERTSモデルとの対応(TS)	LS47 活動に動機づけとなる材料やトピックを取り入れる LS42 子どもの成功のために、課題の難しさを調節する IS2 自分のペースで問題解決したり、活動を達成したりするための時間を子どもに与える	

Fig.1 プロファイルの変化

IV. 考察: 家庭課題→記録→月に 1 度の保護者面談を通して、iPad や DVD を 1 人で行うといった自宅での過ごし方から、保護者と一緒に遊び・課題に参加する場面やこれまで取り組んだことのない遊び・活動に参加する場面が増加した。また、保護者の児へのポジティブな側面への着目も認められた。このことから、家庭での過ごし方や生活場面が広がったと考えられる。背景として、アセスメントを通して本児に応じた課題設定を行うことが可能であったこと、記録用紙や面談時に関わり方や活動のポイントを示したことにより、保護者自身が関わり方や活動の意図を意識して関わることに繋がった可能性がある。家庭支援においては、児及び保護者への包括的な支援を行うことが重要であるとともに、家庭での過ごし方や生活全般へのアプローチが必要であると考えられる。

(KAMIMURA Masaya, ONOZATO Miho)